

			96, 112 Moriya 1950 40-128 Rao and Babu 1955 a. o.
<i>Sorghum nitidum</i> (Vahl) Pers.	G-41	5	10 Ayyanger and Ponnaiya 1941, Gelarier and Mehra 1959 20 Garber 1950 10, 20 Gelarier 1958 10, 28 Krishnasway <i>et al.</i> 1956
<i>Spodiopogon tainanensis</i> Hayata	Cy-006	20 27	
<i>Thaumastochloa cochinchinensis</i> (Lour.) G. E. Hubbard	G-87	18 28	
	G-123	18 29	

* *cf.* text.

□井上 浩：**コケ類一研究と採集・培養** 162 pp. 8 pls. 加島書店 300(1962)日本のコケ（セン・タイ類）の種類に就ての書はこれまでに 1, 2 度でているが、コケの一般通性に関する成書ははじめてといってよく、これまでこの種の書が渴望されていたのである。著者は極めてわかり易くコケの解説を試みて、たとえ植物学を専門に修めた人でなくても理解できるように記述してある。その範囲も、コケの代表的な種類や形態、コケのふえ方とか、一生のうちの变化、あるいは生態や分布というようなコケの性質にとどまらず、コケの利用、採集法、培養法、研究法にも広く及んで記述が進められている。書きぶりにも学問的固苦しさを和わらげる苦心が払われてあり、例えば名称も和名だけに終始して、学名は巻末に対照して記されている。その反面、最新の知識を盛りこむことを忘れてはいない。分類の基準に用いられるようになったタイの細胞内の油体とか、最も原始的なタイとして登場してきたナンジャモンジャゴケ、胞子の発芽などはそれであり、また著者の得意とする部面でもあって適切な記述がしてある。全体 150 頁そこそこの冊子ながら、63 枚の挿図と巻頭の 26 葉の立派な写真とは植物学者からさえ継子扱いを受けているコケに、新しく面白さを見出させるに十分である。また、日頃この方面に関心の乏しい人にも庭先きのコケに親近感を抱かせるよすがとなろう。（野口 彰）

□オオイシソウの学名 武蔵野の湧水からでる川にある特殊な淡水の紅藻として我々に親しく、*Compsopogon Oishii* Okamura の学名で日本特産とされていた。最近の論文 (Krishnamurthy. V. in Journ. Linn. Soc. London, Bot. 58 No. 372: 207-222 (1962) によると、これは北米（ガテマラ以北一帯）、東南亜一東亜（印度～日本）、欧（英国）にひろく分布する *C. coeruleus* Montagne であるらしい。（前川文夫）